

# 15 へき地・複式教育

「へき地・複式教育」とは、へき地教育と複式教育を縮めて表現した言葉です

本道では、複式学級を有する学校の多くはへき地に所在しています。従来は、学習の非効率性などの克服に教育活動の視点がおかれる傾向にありました。しかし、近年は、自然の豊かさや地域ならではの産業や文化・伝統などの特性に着目し、地域と一体になった「特色ある教育活動」が展開されています。

過疎化や少子化に伴い、一校当たりの児童生徒数が減少し、学校の小規模化、複式学級の増加が予測される中、へき地・複式教育のより一層の充実が求められています。

## 1 へき地・複式教育の特質

### (1) へき地教育の特質

へき地教育とは、交通条件及び自然的、文化的諸条件に恵まれない地域に所在しており、各都道府県の条例によって指定された小・中学校（へき地指定校）で行われている教育を指します。教育活動を進めるに当たっては、次のような特質をとらえ、柔軟な発想に基づいた指導をすることが大切です。

- 一つの学級が少人数のため、個に応じた指導の充実を図ることができる。
- 地域的に豊かな自然環境に恵まれており、それらを教材化したり、体験的な活動に生かすことができる。
- 地域が学校に対して期待と関心をもち、協力的であり、学校と家庭・地域社会との緊密な連携を図ることができる。
- 教職員の数が少ないため、共通理解が図りやすく、協力的な指導体制を組織することができる。

### (2) 複式教育の特質

複式教育とは、2個学年以上の児童生徒を、一つの学級に編制した複式学級において行われている教育を指します。

複式学級は、学級編制基準により、二つの学年で構成される学級です。児童生徒の学年の人数の違いなどから、変則的な学級編制となる場合があります。

したがって、複式学級の特質をよく理解するとともに、学校や地域、児童生徒の実態を把握した上で、学習指導や生徒指導をはじめとする様々な教育活動を進めることが大切です。

### 本道のへき地教育の現状（令和4年（2022年）5月1日現在）（札幌市を含む）

道内にある公立小・中学校、義務教育学校数は、公立小学校が959校、公立中学校は554校、公立義務教育学校は19校となっています。

その中で、へき地指定学校数は、公立小学校334校（34.8%）、公立中学校204校（36.8%）、公立義務教育学校12校（63.2%）となっています。この数は、道内の公立小・中学校、義務教育学校全体の35.9%に当たります。

#### へき地級地別学校数

	特別地	準へき地	1級地	2級地	3級地	4級地	5級地	計	割合
小学校 (全959校)	17	57	127	88	29	10	6	334	34.8%
中学校 (全554校)	8	39	84	52	13	4	4	204	36.8%
義務教育学校 (全19校)	1	0	2	2	6	0	1	12	63.2%

### 複式学級の特性

長所と思われること	課題と思われること
<ul style="list-style-type: none"> <li>◇ 学級の児童生徒が異学年で構成され、学年の構成員が毎年変わる。</li> <li>◇ 児童生徒が互いに親密な関係をもっている。</li> <li>◇ 少人数で、児童生徒一人一人に応じた指導が行いやすい。</li> <li>◇ 協力者とリーダーという二つの立場を経験できる。</li> <li>◇ 学年別の指導の場合、児童生徒は、教師がつかない時間帯に、数多くの自学自習を経験できる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>◆ 学年や性別による児童生徒数にかたよりがある。</li> <li>◆ 交流の相手が限定されるため、学習場面で多面的に考えながら討議を展開することなどが難しい。</li> <li>◆ 大きな集団での社会的経験の場や機会が不足がちになる。</li> <li>◆ 児童生徒の年齢や学年が異なるため、個々の能力差、個人差が大きい。</li> </ul>

### いろいろな教育方法

#### ○ 合同学習

一つの学校で2学級以上の児童生徒が学習集団を編制し、一定の人数の集団が必要な学習や、異年齢集団のよさを生かした学習を展開する教育方法を合同学習と呼びます。（全校音楽、全校体育など）

#### ○ 集合学習

近隣の2校以上の児童生徒を一か所に集め、各領域等の指導計画の一部の学習活動を各学校の教師の協力的な指導により展開する教育方法を集合学習と呼びます。2校以上の児童生徒が共同で行う学習（全習）が効果的に行われるよう、各学校での事前事後の学習（分習）を適切に行うことが大切です。

#### ○ 交流学習

学校規模や生活環境の異なる学校（へき地の小規模校と都市の大規模校等）間で、姉妹校的な関係を結び、それぞれの学校が単独では体験できない学習や生活をさせる教育方法を交流学習と呼びます。（手紙の交換、マルチメディア会議システム など）

## 2 へき地・複式校の特性を生かした学習指導

### (1) 複式学級における学習指導

複式学級の学習指導においては、へき地・複式教育のもつ特質を効果的に取り入れ、一人一人に応じた柔軟な指導をすることが求められます。

#### 基本的な考え方

- 地域の豊かな環境を生かした体験的な活動を通して、学ぶことの楽しさや達成の喜びを感じることができるようになるとともに、郷土のよさを理解し、愛する心を培う。
- 自らの力で学習を進める間接指導の充実を図り、学習の仕方を身に付けたり、人間的な触れ合いを深めたりすることができるようにして、主体的な学習態度を育成する。
- 異年齢及び少人数のよさを生かし、一人一人の視野を広げたり、思考力・判断力・表現力などを高め、心豊かに生きる力を育成する。

### (2) 学習指導の指導類型

複式学級における学習指導では、2個学年の児童生徒を同時に指導していくために、指導内容の組合せや指導方法を工夫することが必要です。

指導類型には、学年別指導、同単元指導などがありますが、より効果的に学習を展開するためには、それぞれの指導類型の特性を理解し、学校や児童生徒の実態、学習する教科や内容などを考慮して指導計画を立てることが大切です。

#### <指導類型>

学年別指導

同単元指導

類似内容指導

同内容指導

同内容異程度指導

同内容同程度指導

なお、学習指導要領には次のように示されています。

#### 小学校学習指導要領第1章総則

「第2 教育課程の編成 3教育課程の編成における共通的事項(1)内容等の取扱い」

オ 学校において2以上の学年の児童で編制する学級については特に必要がある場合には、各教科及び道徳科の目標の達成に支障のない範囲内で、各教科及び道徳科の目標及び内容について学年別の順序によらないことができる。

このようなことから、学年別の順序によらない指導については、教師の指導のしやすさといった視点ではなく、児童生徒の学習内容の定着の状況や、学習意欲の向上、学習内容の系統性や各教科の特質、今後の在籍数や学級編制の見通し、転入・転出など児童生徒の立場で十分考慮し、学年別指導を基本とした指導計画を重視する必要があります。

## 指導類型と教科の組合せの例

	主な特性	主な類型	組合せの例		
学年別指導	<ul style="list-style-type: none"> <li>学年の発達の段階、教科の系統性を踏まえられる。</li> <li>思考が連続するように学び方を定着させる必要がある。</li> </ul>	異教科	5年生 6年生	図工 算数	
		同教科異単元	3年生 4年生	国語	文や文章を書く 詩の鑑賞
同単元指導	<ul style="list-style-type: none"> <li>協力的な学習ができ、交流を深められる。</li> <li>教科の系統性や順次性、下学年や転出入児童生徒に配慮する必要がある。</li> </ul>	類似内容異程度 一本案	3年生 4年生	理科	電気や磁石を調べよう 電気や光のはたらき
		同内容同程度 二本案	3年生 4年生	社会	安全なまちづくり（3・4下） 安全なまちづくり（3・4下）
					※ただし、この方式をとる場合、学年差に十分配慮して学習活動を展開することが大切である。
		同内容異程度 一本案	5年生 6年生	体育	「マット運動」（回転する技） 「マット運動」（倒立する技）
折衷案	一本案を主体に、一部二本案を取り入れる。 二本案を主体に、一部一本案を取り入れる。 ただし、学年別の計画が入ることもある。				

※一般的に指導計画の類型を次のように表現しています。

**二本案** …… 学習すべき上下両学年の内容を、2年間に平均的に配分し、いずれの年度においても、両学年に同時に同じ内容を上下両学年のそれぞれの指導目標のもとに、同程度に指導しようとする案。

**一本案** …… 二本案の短所を補うように作成されたもので、単元は同じであっても、上下両学年の指導目標を達成することができるよう、指導の内容や程度をかえて指導計画を作成する案。

### 学習指導の改善のポイント

少人数の学習指導においては、児童生徒一人一人に応じた対応が可能になりますが、教師のリードが強すぎたり、児童生徒の多様な発想や考えの交流が不十分になったりしがちです。学習への興味・関心を持続させ、学習活動の質を高めるためには、次のような視点から授業を工夫することが大切です。

- 問題解決の手順、調べ方を指導するなど、学び方を育てる。
- 一人一人の発言や直接体験の機会を多く設けたり、コンピュータなどの情報機器を取り入れた学習活動を構想したりして、学ぶ意欲を育てる。
- 教師も共に学習するという姿勢をもち、話し合い活動を活性化したり、一人一人との対話を大切にしたりして、表現力を育てる。
- 学習のステップを明確にし、学習に対する個人目標をもたせ自己評価の機会をつくるなど、主体的に学習する態度を育てる。

### 3 複式学級における学習指導の実際

#### (1) 学習過程

学習過程は、児童生徒が学習活動を進めるための基盤となるものです。そのためには、基本的な学習の流れを理解させ、定着させておく必要があります。

学習指導を効果的に行う学習段階として、一般的に、次のような4段階の学習過程があります。

#### <4段階の学習過程>

段階	① 課題把握	② 解決努力	③ 定着	④ 習熟・評価
学習活動	学習課題が分かり、解決への見通しがもてる。	自分なりの方法で解決に向けて努力する。	学習結果を交流し、学習を見つめ、学習事項が分かる。	学習を深めたり、自己評価を行ったりして、次の学習への意欲をもつ。
指導	直接指導	主として間接指導	直接指導	主として間接指導

#### (2) 直接指導と間接指導

複式学級で学年別指導をする場合は、教師が一つの学年を指導している間、他の学年の児童生徒は自学自習となります。前者を「直接指導」、後者を「間接指導」と呼びます。

直接指導の留意点	間接指導の留意点
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 自学自習を成立させる契機とする。</li> <li>・ 指導内容を精選し、学習方法や条件を整え、学習課題を明確にする。</li> <li>・ 自学自習を支える基礎・基本の指導をする。</li> <li>・ 学習したことを確認し、賞賛して、自主学習への意欲をもたせる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 児童生徒の自主性を養う絶好の機会とする。</li> <li>・ 学習の目標をはっきりつかむことができるように、指示を明確に伝える。</li> <li>・ 学習技能を定着させ、個人が自学自習や小集団での学習活動をできるようにする。</li> <li>・ 次の直接指導につながる準備の時間とする。</li> </ul>

同内容指導の場合は、学年差、個人差に配慮しながら同一の流れで学習指導を行います。学年別指導の場合は、直接指導と間接指導の場面が生じます。

そこで、両学年に学習を成立させるために上学年と下学年の間に「わたり」や「ずらし」という工夫が必要となります。

#### (3) 評価の工夫

少人数の学級においては、一人一人に接する時間も多く、児童生徒のよさや可能性を伸ばす指導がより可能となります。評価においては組織的に児童生徒の変容をとらえ、多面的な評価を工夫するなど、評価の観点を明確にし、指導計画や指導法の改善に生かすことが大切です。

